

グスタフ・クリムトの風景画における資料収集について

前田 朋美

美学美術史学専門 前期課程2年

ウィーン世紀末の芸術家であるグスタフ・クリムトの天井画、壁画、油彩画、素描を主に、さらに19世紀末のウィーンの芸術界の動向を含めた社会状況を研究対象に加える。イニシアティブの期間内に、これまでの卒業論文、修士論文における研究内容を整理し、新たな課題を検討するとともに、19世紀末のウィーンにおける芸術界の動向について資料収集と整理を試みている。

19世紀末ウィーンを代表する芸術家であるグスタフ・クリムトの画業を捉え直すという最終目標を掲げ、卒業論文にて風景画、修士論文にて寓意画の代表作である「学科絵」と「ベートーベンフリーズ」に焦点をあて考察してきた。グスタフ・クリムト(1862-1918)は19世紀ウィーン芸術界の指導的役割を担い、ブルク劇場の天井画、「接吻」、ストックレー邸のフリーズ、「ベートーベンフリーズ」といった傑作を数多く生み出した。クリムトは生涯におよそ十数点の壁画や天井画、230点の油彩画、芸術家グループによって発行されていた機関誌の表紙や挿絵、スケッチ、数千にも及ぶ膨大な素描を制作している。作品はその描かれたモチーフから寓意、肖像、風景画のジャンルに分類が可能である。それゆえグスタフ・クリムトに関する先行研究ではそれぞれのジャンル内での考究に留まっており、ジャンルを超えた比較、検討には及んでいなかった。

しかしながらクリムトは寓意画、風景画、肖像画を同時進行させながら制作していたと考えられ、ジャンルを超えた比較、検討がクリムトの研究において必要不可欠な作業となった。点描の観点から3つのジャンルを超えたつながりを指摘すべく、資料の収集、整理を試みる。

ジャンルを超えた考察にあたり、比較、検討の1つとして点描機能を取り上げる。風景画における点描の使用に関して卒業論文にて考察したが、画業を概観することにより肖像画、寓意画にも点描が使用されていることに気がつく。風景画の点描使用は1900年初頭に始まり、1909年頃に制作された「公園」を境に使用が減り、晩年の作品「ガスタイン」では点描がみられない。同様に、寓意画、肖像画の背景、衣服の模様

に点描が使用されていたが、風景画と同様にその使用頻度は晩年になるにつれ減る。点描が肖像画、風景画、寓意画のジャンルを超えたつながりを示す要素であり、ひいてはクリムトの画業、ウィーン芸術界に関しての新たな解釈が可能となる。

以上の研究課題に対して先行研究、資料収集に取り組んでいる。クリムトは作品に対する自身の言葉、解釈等をほとんど残していないことから、同時代のウィーンにおける社会的状況、芸術界の状況が研究資料となる。またクリムトの作品に対する学術的な研究論文は少ない故に、クリムトが活動に参加していたウィーン分離派の状況、分離派の機関誌『ヴェル・サクルム』、1900年当時の新聞や雑誌に寄せられた作品や当時の芸術界に対する批評記事、展覧会紹介記事等も同様に極めて重要な資料となる。上述の1900年代初頭の新聞、雑誌等の資料を取り寄せるには、ウィーンにあるオーストリア国立図書館、資料館を実際に訪れての資料収集を行う必要があるが、その前段階として現在、批評記事、特に分離派に関する資料を日本の大学図書館、美術館図書館から収集し、整理を行っている。分離派は総合芸術を目指して活動していたことにより、クリムトをはじめオットー・ワグナー、カール・モルらの当時ウィーンを代表する芸術家の多くが分離派のなんらかの活動に関与していた。それゆえ分離派に関する資料は比較的多く残され、且つ文献として1つにまとめられている。また、ウィーンの芸術界の動向を知る手だてとして、ウィーン工房の内容を把握する必要が生じる。クリムトの芸術家としての展覧会における活動、同時代の芸術家との交流、批評からクリムトの作品を客観的に捉えることが可能となる。

以上の資料収集の成果は、19世紀末の社会、文化的な観点からのクリムト研究に新たな視点を提供しうる。

◎現段階で収集を試みている文献リスト

- Ludwig Hevesi, *Altkunst-Neukunst*, Wien, 1909
- Hermann Bahr, *Secession*, Wiener Verlag, 1900
- Peter Vergo, *Art in Vienna, 1898-1918*, Phaidon, Oxford, 1981
- Ludwig Hevesi, *Acht Jahre Sezession*, Ritter, Klagenfurt, 1984
- Herausgeber, *Vereinigung Bildender Künstler, Wiener Secession*,

- Die Wiener Secession, H. Bohlaus Nachf, 1986
- ・ Donald Daviau, *Der Mann Von Übermorgen*, Österreichischer Bundesberlag, Wien, 1984
 - ・ Robert Waissenberger, *Die Wiener Secession*, Jugend&Volk, Wien, 1971
 - ・ Ilona Sarmany-Pasons, *Der Einfluss der französischen Postimpressionisten in Win und Budapest*, Mitteilungen der Österreichischen Galerie, Nr. 78-79
 - ・ “Secessionismus und Abstraktion”, Österreichische Kunst 1900-1930, Galerie Metropol (展覧会カタログ)

・「スーラと新印象派」2002年 (展覧会カタログ)

◎資料所蔵機関

京都工業繊維大学 (図書館), 京都国立近代美術館, 愛知県アートライブラリー, 豊田市美術館, お茶の水女子大学 (図書館), 国立西洋美術館図書館, 東京国立近代美術館ライブラリー

「生きられる空間」の複相性をめぐって

——文学テキストに見る出来事の表象と記憶の問題

上野 ふき・鶴田 涼子

ドイツ文学専門 後期課程1年

1. はじめに

平成18年度奄美・沖永良部研究合宿は、科研費プロジェクト「言語表象と脳機能から見た環境生成のメカニズム——生きられる空間の複相性をめぐって」の四本柱のうち、「言語記号システムの先端的な分節-表象の場である文学テキストにおいて、出来事の表象と記憶の問題がどのように探求されてきたのか」、「日本の社会・自然システムの周縁部である離島地域において、現代的なシステムのグローバル化によって、伝統的な身体、社会、自然の分節-表象のされかたがどのように変容したのか」という2つのテーマに基づいて企画された。報告者上野は、これまで前期課程において、テキスト内における鉱山、鉱物に象徴された地下世界を通して、ドイツ・ロマン派の詩人ノヴァーリスの世界観、宇宙観を考察してきた。しかし修士論文を書く際に改めて、ノヴァーリスにおける詩的世界と自然科学的環境が相互に作用するという問題が浮かび上がった。今後そのテーマを深めるにあたって、奄美・沖永良部研究合宿がいかにより有益な体験となったか、それを以下に示したいと思う。また、報告者鶴田は民間伝承に関心を持っており、修士論文ではグリム童話における涙の役割について考察してきた。グリム童話では、主人公の救済につながるものとして自然崇拝と登場人物の涙を流す行為があげられる。しかし修士論文執筆の際、実際に童話が編まれた19世紀の人々の心性や時代背景の観点が不足しており、今回の研究合宿では、人々の心性を作り出す根底にある人々の生きた

環境が、民話の中で如何に語られうるか、その実態の一例を聞き取ることが出来た。

2. ノヴァーリス及びドイツ・ロマン派における自然科学的環境と文学の関わり

現在報告者(上野)は、文学テキストに描かれた自然科学的側面と内面空間が、現実世界における自然科学と空間とどのように係わり合い、互いに作用しあっているかということテーマとして研究を進めている。その際手がかりとするのは、詩人ノヴァーリスを中心としたドイツ・ロマン派のテキストである。ノヴァーリスは法学、哲学、文学、歴史といった人文科学研究だけでなく、数学、物理、化学、地質学、鉱物学などの自然科学研究にも親しみ、これらあらゆる分野の知識を融合させた詩・小説を理想型として作品を残した。特に地質学、鉱物学にいたっては、彼が就いていた職にも関連していたこともあり、その造詣の深さは、彼の師 A. G. ヴェルナーに劣らない。日々の生活と密着した自然観察や、学問的な探求心から生まれた彼の作品には、美しい鉱山が描写されており、それは内面と宇宙空間を同一視した *unio mystica* という世界観・宇宙観を表象している。また、地下を探求する姿勢は錬金術における賢者の石をはじめとして、神秘主義やアニミズムといった非キリスト教的宗教観につながる。

日本の最南端にある沖永良部島の地形は非常に複雑であり、北部は比較的なだらかな地形が広がるが、中部以南は緑豊かな山が連なっている。中でも沖永良部